



Data	
監督:	野村芳太郎
原作:	松本清張『砂の器』
脚本:	橋本忍/山田洋次
出演:	丹波哲郎/森田健作/加藤剛 /春田和秀/加藤嘉/島田 陽子/山口果林/佐分利信 /緒形拳/松山省二/三木 彰吉/内藤武敏/稲葉義男 /穂積隆信/夏純子/松本 克平/花沢徳衛/笠智衆/ 春川ますみ/渥美清/菅井 きん/殿山泰司/野村昭子

## 👁️👁️ みどころ

「生誕百年追悼橋本忍映画祭」で、私が邦画の断トツのベスト1に挙げる『砂の器』を再鑑賞。丹波哲郎も、緒形拳もそして加藤剛も今は亡き人だが、ピアノ協奏曲『宿命』の美しい旋律が流れる中で展開される“父子の巡礼の旅”を観ると、改めて涙、涙、また涙……。

私が弁護士登録をした1974年から既に45年が経つが、あの時代の映画は素晴らしかったし、私にとってこれ以上の名作はない。「働き方改革」が叫ばれる今日では、到底考えられない、刑事の休みを利用した私費での伊勢出張もお見事！そこで、渥美清扮する映画館の支配人は、いかなる情報提供を？

“ズーズー弁”と“カメダ”。それだけの手がかりから、よくぞここまで真相の解明と犯人の逮捕ができたものだ。松本清張の傑作推理小説の醍醐味と脚本の妙が融合した邦画の最高傑作をトコトン楽しみかつ感動したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■断トツの邦画 No.1 を 45 年ぶりに鑑賞！■

私の“生涯ベスト5”中でトップに挙げる映画は、洋画では『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）だが、邦画では断トツで『砂の器』（74年）。私は同作を1972年4月から1974年3月まで2年間続いた司法修習の末期に観たが、その鑑賞中は感動で身体が打ち震えていた。とりわけ、①捜査会議、②父子の巡礼の旅、③ピアノ協奏曲「宿命」の演奏会、という3つのシーンを交差させながら描く後半の構成は、実にお見事！大きな拍手の中で演奏と指揮を終えた和賀英良（加藤剛）には、舞台の袖で待機する今西刑事（丹波哲郎）によって逮捕される運命が待っていたが、新曲披露の中でハンセン病の父親・本

浦千代吉（加藤嘉）と再会した和賀の胸中は？

今年の7月19日には、同作の脚本を山田洋次と共に書いた橋本忍が100歳で死亡し、丹波哲郎も2006年には死亡、そして今年の6月18日には加藤剛も死亡したが、本作は私の中で永遠に断トツのベスト1作品として生き残っている。私は本作の前半は淡々と観ていたが、“宿命”の演奏が始まり、その美しいピアノの旋律が流れる中、巡礼の旅をする父子の姿が登場すると、思わず涙が……。そして、緒形拳扮する三木謙一巡査との絡み、今西刑事が足で稼いだ捜査の中で解き明かしていく和賀英良の出自と成長の奇跡の物語を観ていると、その間ずっと涙が止まらない状態に。そしてクライマックスでは……？

シネ・ヌーヴォーの「生誕百年 追悼橋本忍映画祭」によって、断トツの邦画No. 1作品たる本作に45年ぶりに再会できたことに感謝！

## ■□■ “ズーズー弁” と “カメラ” 。そこから浮かぶ犯人像は？ ■□■

韓国映画には“犯罪モノ”の傑作が多く、『殺人の追憶』（03年）（『シネマ4』240頁）、『チェイサー』（08年）（『シネマ22』242頁）、『殺人の告白』（12年）（『シネマ31』205頁）、『悪魔は誰だ（MONTAGE）』（『シネマ35』58頁）等がある。中国映画でも『薄氷の殺人』（14年）（『シネマ35』65頁）は“犯罪モノ”の傑作だった。これらの“犯罪モノ”は犯人捜しがメインだから、犯人がわかるとそれで物語は終わってしまうのが宿命。しかし、本作では映画冒頭に提示される、東京の国鉄蒲田操車場で発生した殺人事件の犯人捜しが終わりに近づくと、あとは本作特有の演出の妙が突出していくのでそれに注目！

本作冒頭の殺人事件のポイントは、蒲田駅近くの小さなトリスパーの片隅で2人の男が話し込んでいた会話がズーズー弁のようだったことと、会話の中に“カメラ”という言葉が出ていた、というホステスの供述。しかし、それ以外には死体の身元も全くわからず、犯人の手がかりも何もなかったから、捜査はお手上げ。今西刑事と吉村刑事（森田健作）は“カメラ”のみを頼りに東北地方に出張したが何の成果もなく、出張の日数と旅費、宿泊費は無駄な経費になってしまった。その後の懸命な捜査にもかかわらず、何の手がかりも得られないまま捜査本部は解散。このままでは迷宮入りだ。

そんな中、吉村刑事の猟犬のような頑張りによって、銀座のホステス・高木理恵子（島田陽子）が列車の中からバラまいていた紙片（実は、白いシャツの切れ端）を発見したのは大きなお手柄だった。そして、見込みどおり、それに人の血が付着していたことがわかったうえ、その血痕がO型で、和賀英良の血液型と一致した時の2人の刑事の喜びようは如何ばかり。これはさしずめ、日本時間11月24日の未明に発表された、2025年万博の開催地が「大阪！」と決まった時の松井一郎大阪府知事と吉村洋文大阪市長と同じようなものだろう。もっとも、“大阪万博 2025”は開催地が決定しただけで、すべての計画立案はこれから。それと同じように、国鉄蒲田操車場殺人事件も今やっとな犯人像の糸口がつかめたばかりだ。これから犯人を特定し、証拠を集め、殺人の動機や全貌を解明し

ていくのは至難の業だ。しかし、捜査本部が復活したのは心強いかぎり。しかして、本作中盤は、今西刑事の出雲地方や大阪での“足で稼ぐ”地道な作業の積み重ねになる。さらにその後は、何の成果もなかった東北地方への贅沢な出張の反省(?)として、今西刑事の自費による伊勢出張と、そこでのあっと驚く成果も登場するので、それにも注目!そんな“足で稼いだ”捜査によって、少しずつ浮かびあがってくる犯人像とは……?

## ■捜査は足で!東北の次は出雲地方へ■

大阪に比べると東北地方は涼しいが、それでも夏は暑い。しかし、本作導入部に見る二人の刑事の東北地方への出張は、夏なのにきちんとネクタイスーツ姿で仕事しているから偉い。日本では近時いつのまにかクールビズやノーネクタイの習慣が定着し、私も夏場にネクタイなどしたことがないが、1950年代は刑事も外での仕事はネクタイスーツ姿が原則だったわけだ。また、弁護士は基本的には事務仕事で室内仕事だが、刑事は足で稼ぐ商売。革靴の底がすり減ってこそ成果を挙げられる職業だから、比較的涼しい東北地方とはいえ、夏場の出張は大変だ。もっとも、何の成果も挙げられなかった東北出張は2人の刑事にとって贅沢な出張になってしまったが、さあこれからの今西刑事の出張先は?

吉村刑事の足で稼いだ猟犬のような捜査に対して、東京に残った今西刑事の捜査は知的なもの。彼は“ズーズー弁”の“カメダ”をどう読み解くかを見つめ直し、ある疑問を学者に相談した結果、“ズーズー弁”は東北地方だけでなく出雲地方にもあることを発見。さらに“カメダ”=“亀田”と固定せずに島根県の地図を拡大鏡でたどった結果、たどりついたのが“亀嵩”だ。さあこうなると、今西刑事の次の出張先は出雲地方だ。

松本清張の推理小説は、時刻表のトリックが多く日本人の興味を呼んだ『点と線』をはじめとして“列車の旅”が大きなポイントになるが、それは本作も同じ。この時点では、既に被害者の養子・三木彰吉(松山省二)からの申し出によって、やっとその指名が三木謙一であることとその身元が判明していたから、出雲地方への出張に向かう今西刑事の任務は、この三木謙一が誰に恨まれていたのかという“殺しの動機”をつかむこと。しかし、出雲、岡山、亀嵩と続く出張での聞き込み捜査によると、巡査をしていた三木謙一(緒形拳)は“警察官の鏡”のような人物で、人に恨まれるようなことなどありえないという情報ばかり。そのため、出雲方面での出張でも、今西刑事の捜査は行き詰ってしまったが……。

## ■次の出張は大阪の浪速区へ。戸籍調査で何が判明?■

今は“個人情報保護法”があるため、弁護士の調査はもちろん警察にも“捜査の壁”がある。しかし、震災のため丸焼けとなり、住民の戸籍も原本もろとも焼失してしまった大阪市浪速区の戸籍係を調査する今西刑事の姿を見ていると“個人情報保護法”の壁がなかった1950年代は、戸籍の照会に対する対応(回答)も大らかだったことがよくわかる。

浪速区で商売をしていた和賀英蔵・キミ子夫妻は震災で死亡してしまったが、そこで丁

稚奉公していた若者は生き残ったらしい。そして、驚くべきことに当時は非常措置として、その若者が本人の届出だけで和賀英蔵・キミ子夫妻の子供として新たな戸籍を作ることが可能だったらしい。弁護士登録したばかりの1974年に本作を観た時は、そんな法律（戸籍法）上のカラクリがわからなかったが、今改めて観ると、なるほどなるほど。

しかして、今西刑事が見る戸籍には、和賀英蔵・キミ子夫妻の子供として“和賀英良”の名前があったが、この和賀英良とは、今をときめくあの作曲家でピアノ演奏家の和賀英良のこと？もしそうだとすると、彼の本名は一体なに？そして、浪速区のと賀商店の丁稚として働いていたこの男の本当の父親、母親は？さらに、その出身地は？出自は？

## ■□■伊勢への“自費出張”で、決定的証拠をゲット！■□■

誰からも恨まれるはずはない模範的な巡査だったという三木謙一が、東京の国鉄蒲田操車場で殺されたのは一体何故？また、警察官を退官した後に念願だったというお伊勢参りに旅立ったことはわかったが、何故伊勢に到着した彼が急に縁もゆかりもない東京に行き、あんな惨事に遭ったの？

今西刑事はそれを調べるためにどうしても伊勢への出張捜査が必要だと考えたが、東北はもちろん、出雲、大阪への出張でもヒントは得たものの、決定的な証拠は固められなかったから、無駄な出張費（？）がかさむばかり。刑事の仕事はもちろん公務だから、一刑事が出張の費用対効果まで心配する必要はないのだが、昔気質の今西刑事はそれが気になっていたらしい。今どきは、刑事モノの映画にそんな微妙な設定をしても、若い刑事には全く理解できないだろうが、1950年代の松本清張の推理小説では、そこでわざわざ休日を利用して、私費を投入して、公の捜査のため、伊勢に出張する今西刑事の姿が登場するので、それに注目！

今西の聞き込みによると、三木謙一が伊勢の旅館に宿泊したのは間違いない。女中さんが当時の三木の様子を詳しく語ってくれるのも今では考えられない風景だが、そこで得た重要な情報は、三木が映画館に2日も続けて行ったことだ。お伊勢参りを終えてほっとした三木がぶらりと映画館に行ったことは考えられても、2日も続けて同じ映画館に行くのはおかしい。見た映画がよほどの名作で、もう一度見たくなくなったとも考えられるが、丁度上映作品が交代する曜日だったと聞き、今西は途方に暮れることに。なぜ三木謙一は2日も続けて、しかも違う映画を見るため、同じ映画館に？ちなみに、山田洋次監督、渥美清主演の『男はつらいよ』シリーズの第一作が公開されたのは1969年。渥美清も1996年8月4日に死亡したが、本作ではその渥美清が伊勢の映画館の支配人として登場し、今西刑事との間で何とも面白い会話を展開してくれるので、それにも注目したい。

なお、国会議員は国民の代表であって、選挙区や選挙人の代表ではないが、どうしても地元選挙区を大切にするもの。そして地元選挙人にとっても、“おらが選んだ候補者”が国会議員になれば、それが自慢の種になるから、写真の一枚も飾りたくなるのが人情だ。な

るほど、ここでも橋本忍と山田洋次の書いた脚本の妙に拍手！

## ■□■ネタ集めは完了！その“編集”は？その手法は？■□■

映画制作では、連日続く撮影が基本。それによって、1シーン毎、1カット毎に俳優たちの演技がフィルムに撮影されていくが、撮影はあくまでネタ集め。つまり、連日の撮影で積み上がった膨大なフィルムは、撮影完了後の“編集”（つまり、フィルムの切り貼り）という作業によって、長くもなるし、短くもなるし、どこをどのように強調するかも決まっていく。また、それに合わせて音楽や音響を効果的に入れていくから、映画作りのエッセンスは、一つ一つのシーンやカットの撮影よりも、この編集にある。

本作では、長い長いクライマックスで、①事件の犯人を和賀英良と断定し、逮捕状を請求する捜査会議のシーン、②和賀英良の指揮によるコンサート会場での演奏シーン、③父子の巡礼の旅、の三つを交差させながら描くという編集方針が決まった段階で、その大ヒットは約束されたようなものだ。そこではじめて登場するハンセン病に罹患している父親、本浦千代吉（加藤嘉）と後に名前を和賀英良と改めた、少年時代の本浦秀夫（春田和秀）による父子巡礼の旅は、今日まで語り継がれる最高のシークエンスの連続で、原作者の松本清張をして「小説では絶対表現できない」と言わしめたものだ。そして、今日は捜査本部の合同会議が開かれる日。この会議の席で分厚い資料を持って参加した今西刑事の口から、被疑者と和賀英良に対して逮捕状請求に至る経過の説明がされていくので、それに注目！

私は1974年の弁護士登録直後から、大阪国際空港公害訴訟の弁護団会議に毎週のように参加したが、なるほど警察の捜査会議はこんな風に関われるわけだ。しかして、この会議の結果、今西刑事の見込みどおり、和賀英良に対する逮捕状請求は決定されるのだろうか？

## □■□捜査会議での今西刑事の事件全貌の報告は？■□■

能登の田舎に本浦千代吉の子供として生まれ、子供時代に父親と過酷な巡礼の旅を続けた和賀英良こと本浦秀夫がなぜ音楽の才能をもっていたの？それは謎のまま、今西刑事の捜査でも明らかにならなかったが、それは本来の犯人捜しとは無関係。今西刑事の足で稼いだ捜査によって、今や三木謙一殺しの“犯人の特定”については、血液等の物的証拠は十分だ。また、芸術家、音楽家としての社会的地位も名誉も手に入れた和賀の三木謙一殺しの動機もパッチリだ。なぜなら、本浦千代吉は今なお人々から遠く隔離された療養所で生きているという情報が、思いもかけず蒲田駅近くのトリスパーで、三木の口から和賀に伝えられたのだから。

捜査会議における今西刑事の事件全貌の報告は、詳細かつ緻密なもので、そこに出席した誰もが納得しうるものだったが、彼の出張の足が本浦千代吉の療養所にまで及んでいたこと、そしてまた本浦千代吉がそこで今なお生きていると聞くと、捜査会議に出席してい

た幹部たちはビックリ。そこで意外だった（ある意味で当然だった）のは、本浦千代吉は今をときめくあの和賀英良が巡礼の旅を共にした本浦秀夫の成長した姿であると決して認めなかったことだ。

さらに、今西刑事の説明によると、千代吉を療養所に送り込み、秀夫を自分の養子として育て上げた三木巡査は、お伊勢参りの最後の日にあの映画館の中で地元出身の代議士田所（佐分利信）と共に写真に写る、立派に成長した和賀英良の姿をみて驚き、すぐに東京の和賀に連絡をとり、直ちに東京に向かったらしい。そして、人目をばばかりながら、蒲田駅近くの小さなトリスバーの片隅で再会した本浦秀夫ことと和賀英良に対して、三木謙一は千代吉がまだ生きて療養所生活をしていることを告げ、一目だけでも父親に会うことを強く勧めたらしい。しかし、今の和賀にとっては、千代吉のようなハンセン病の父親の存在はやっぱりいなかっただけだったから、和賀は千代吉との面会を断固拒否。その結果、二人の面会には、必然的にカメラという言葉が頻繁に登場したうえ、三木謙一の出雲弁（ズーズー弁）も次第に大きくなり、半ば言い争いのようなになったわけだ。もっとも、これはあくまで今西刑事の推測だが、和賀英良が三木謙一を殺害する動機がそこにあったことはこれによって十分根拠づけられることになる。したがって、捜査会議がこれらの今西刑事の報告を承認さえすれば、あとは裁判所への逮捕状請求の手続きに移るばかりだが・・・。

## □■□ピアノ協奏曲『宿命』の主題に注目！■□□

私が本作を邦画断トツベスト1に挙げる理由の1つは、本作のテーマ曲である“ピアノと管弦楽のための組曲”（ピアノ協奏曲）『宿命』の素晴らしさだ。私は1974年に本作を鑑賞した後、すぐにそのサウンドトラックのLPを購入し、当時凝っていたステレオ音響システムで何度も聴いたが、そのたびに映画のシーンが浮かび上がり涙したものだ。和賀が大規模な演奏会ではじめて発表するその大作は、『宿命』というタイトルがつけられたが、それはまさに彼が体験した父子の巡礼の旅、そして三木巡査の好意によって父親と離ればなれになりながらも、やっとまともな世界で生きてこられた自分の“宿命”を壮大なピアノ協奏曲として完成させたものだ。

今、和賀は『宿命』の指揮と演奏に懸命だが、ピアノ協奏曲ではラストの“カデンツァ”とよばれる個人技の披露がハイライト。しかして、本作のラストでは、いよいよ和賀の演奏がそのカデンツァに入っていくが、その舞台袖には今西刑事と吉村刑事が逮捕状を持って待機中。和賀英良のカデンツァが終わると会場には割れんばかりの拍手が湧きおこったが、今この時、和賀英良は誰と面会していたのだろうか？

2018（平成30）年11月30日記